韓日古代寺院の整備方法研究
－6～8世紀の寺院を中心に－

金哲主・卓京柏

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．古代仏教の流れと寺院の建立
Ⅲ．古代寺院の整備事例の検討
Ⅳ．おわりに

要　旨　　韓国と日本の古代国家は、王権強化と社会統合の原理として仏教を受容し、寺院を建立した。このような寺院の中には、時の流れとともに廃寺となるものもあり、また仏国寺のように現在までその法灯が続くものもある。現代にいたり、このような寺院は文化遺産として保存と活用という側面から整備がなされている。本稿では、古代国家の仏教受容による寺院の形成過程と整備事例を検討した。その結果、古代寺院の中心的な要素は、塔・中心軸線・正面性であり、今後このような要素を持つ古代寺院の特徴と魅力がより良く表現できる整備方法の提案を試みた。

キーワード　　古代寺院　塔　中心軸線　正面性　遺跡整備

国立扶餘文化財研究所

Ⅰ．はじめに

韓国の遺跡整備事業は、1907年に行われた崇禮門の修理工事に始まり、1960年代の浄化事業、1980年代以降の大規模発掘調査後になされた整備事業など、長期間にわたり「整備」という名のもとに遺跡の保護、保存処置がなされてきた。しかし、長期間に渡って多くの「整備事業」がなされてきたにもかかわらず、明確な概念不在の整備が、かえって本来の遺跡の性格を曖昧にし、観光地に変貌させている点は、文化遺産の保護・保存の次元において、もう一度検討しなければならない問題である。

整備された文化遺産のなかで、古代寺院は、当時の国家建設と社会統合のための運営原理として導入された仏教の物理的な現象物である。初期に、王室を中心に仏教が受容される原因もここにあって、君主としての統治力を行使するための権利を提供してくれるのみならず、それによって君主はさらに高貴な存在として尊敬を受けることとなった[1]。当時の寺院は都城の内外に位置し、護国的な性格をもって建立された建築物であり、中国から流入した仏教思想と密接な関係をもちながら発展してきた。

しかし、現代に入って整備された古代寺院は、現状保存的な側面に焦点があてられ、いくつかの整備類型が混合されており、古代寺院の特徴であるその時代の仏教思想とその背景、建築物がもっている素晴らしさを知らしめるには多少いたらない点がある。

そこで本稿では、まず古代寺院の変遷について、その思想的背景となる仏教の流れを通じて探ることとする。そのうえで、古代寺院の整備事例を検討することによって、その類型を抽出し、遺跡整備において重点的に扱わなければならない部分を明らかにし、より改善された遺跡整備方法案を提示したい。

韓国の事例についての検討は、百済と新羅の代表的な古代寺院である弥勒寺址（7世紀）と皇龍寺址（7世紀）を中心とし、日本の事例についての検討は、7世紀の代表的な寺院である飛鳥寺（6世紀）、四天王寺（7世紀）、および既存の分類案における日本の寺院のタイプ別[2]に検討することとする。

Ⅱ．古代仏教の流れと寺院の建立

1．高句麗

中国から韓国に仏教が伝えられたのは、『三国史記』によれば高句麗第17代小獣林王二年(372)に、前秦王符堅が使者とともに僧侶順道を派遣し、仏像と経典を送ったことに始まる。当時、符堅は大乗仏教の三論宗を信奉していて、弥勒信仰を信奉する道安の弟子であり、当時の高句麗に三論宗と弥勒信仰が同時に流入したものとみられる。

以後、小獣林王五年に初めて寺が建てられ、順道は肖門寺に、阿道は伊弗蘭寺に拠った。

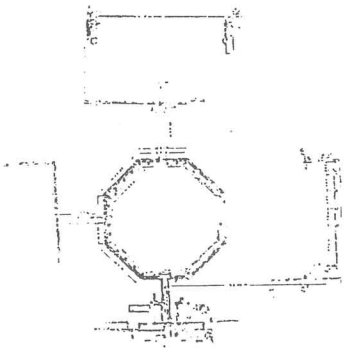
故国壌王は令を下し、仏教を崇め、福を得られるように勧めた。また広開土王は平壌に9寺を建て、長寿王代に至ると、仏教は除災招福を教えるものとして広く民間に信奉され[3]、文咨王七年（498）には、金剛寺（清岩里寺址）の創建が伝えられている[4]。

それ以後の高句麗は、幾度にも渡る隋の侵略と百済、新羅との戦争など混乱の時代に入ったため、仏教がどのように発展したのかよくわからない。ただ、『続高僧伝』巻八 法上條に、平原王（559～589）が大乗の教えを受け、これを広めるにあたって釈迦入滅以来の仏教東漸の歴史を明らかにするために僧侶を北斉に送った話が記録されていて、仏教が維持されていたことがわかるが、栄留王代に流入した道教によって、仏教は次第に衰退していった。

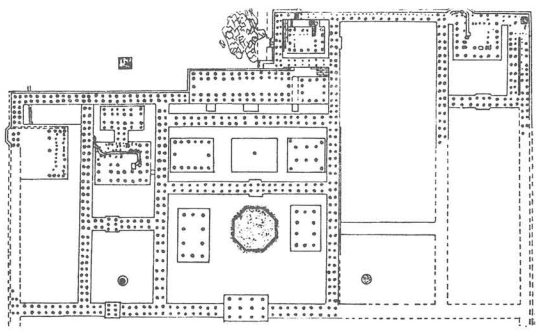
栄留王代の慧灌が日本に渡り、日本の三論宗の始祖となり、恵亮は新羅に入り、新興王代に教団組織に貢献して初代国統となり、嬰陽王代の普徳は淵蓋蘇文の道教奨励に対する反発から百済に入り、新たに涅槃宗を開創した。

このように高句麗には、最初に大乗仏教である三論宗と弥勒信仰が流入したが、三論宗がより優勢な位置を占めたようである。しかし現存する寺院はそれほど多くなく、三論宗と寺院間の関係を明らかにするには多少の難しさがある。

現在、高句麗寺院として知られる寺院としては、清岩里寺址[5]として有名な金剛寺址、平壌の定陵寺址がある。1938年に調査された金剛寺址は南向きで、中門内には八角木塔が配され、東西に2棟の建物址、そして北側に3棟の建物址が東西に整然と並んで配置されている。1974年に確認された定陵寺址は5世紀に創建されたと推定され、やはり南向きで、中門内には八角木塔1基、その東西に2棟の建物址があり、北側は回廊で閉ざされているが、回廊内に3棟の建物址が東西に整然と並んで配置されている。高句麗寺院にはこの他にも八角建物址が確認された上五里寺址と、大乗仏教の千仏思想によってつくられた塑造仏像が確認された元五里寺址などがある。以上、高句麗の寺院配置型式は、木塔を中心に3金堂（群）が配置されていて、当時高句麗で流行した大乗仏教の三論宗との関係性をうかがうことが



第1図　金剛寺址



第2図　定陵寺址

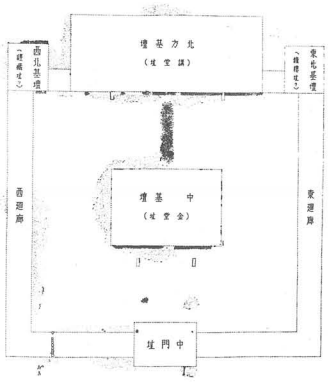
できる。高句麗の寺院とほぼ類似した配置は、日本の初期寺院である飛鳥寺址にも確認される[6]。

2．百　済

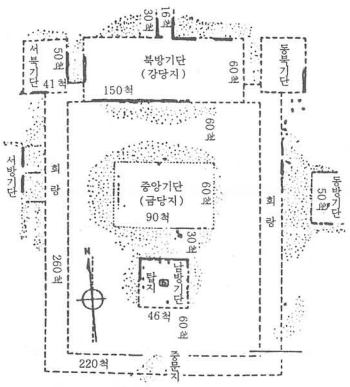
三国の中で高句麗の次に仏教が伝えられた国は、百済である。第15代枕流王元年（384）に、摩羅難陀が東晋から仏教を初めて伝え、翌年漢山に寺を建て10人の僧侶を置いたとある[7]。以後、『三国遺事』には、阿莘王が百姓たちに「仏法を信じ福を求めよ」[8]と言ったとあり、仏教が当時の王室の主導のもと国家の平安と発展を祈る護国仏教の性格を持っていたことがわかる。聖王四年（526）には謙益が中インドに渡って、五分律などを翻訳し、曇旭、惠仁は律疏三十六巻を書いた。以後、聖王十九年（541）に梁に使臣を派遣し、毛詩博士と『涅槃経』などの注釈書とともに工匠・画師などを招請し、梁武帝がこれを聞き入れたとする。このような事実からみて、聖王以後の百済仏教は、戒律主義的な傾向を持っていたものと看取される[9]。

しかし、王室をはじめとする貴族的文化を発展させた戒律主義は、大衆的な展開をみることはなかった。すなわち、百済仏教は律令制度の確立に寄与し、貴族層によって洗練された文化を発展させたが、その文化能力を他の階層に拡散させることには成功しなかった。以後、新しい文化運動が起きるが、これは弥勒上生信仰を下生信仰化して仏教の大衆化を企図するものであった[10]。弥勒寺はこれを代表するが、百済仏教の大衆化は大衆的な文化階層を包容しながら展開したのではなく、結局貴族文化を大衆に伝播させるに留まったといえる。また、あくまで貴族文化を基盤としたため、武王が追求した仏教の伝播は一代限りで終わったものとみられる。

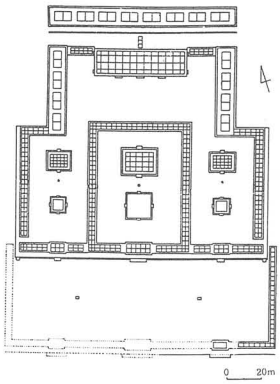
戒律主義に集約される百済仏教の流れにおいて、現在まで漢城時代の寺院址はまだ発見されていない。公州には、聖王五年（527）に建立された大通寺址が残っていて、扶餘には遷都後の6世紀代に建立された東南里寺址、軍守里寺址[11]、定林寺[12]、陵寺[13]などがある。7



第3図　東南里寺址



第4図　軍守里寺址



第5図　弥勒寺址

世紀代に建立された寺院としては、扶餘の王興寺[14]、益山の弥勒寺[15]と帝釈寺[16]などがある。

これらの寺院に共通してみられる伽藍中心部の配置は、南北方向の直線軸に従って、門、塔、金堂、講堂が置かれ、門の左右に連結された南北に長い長方形の回廊が、塔と金堂の回りを巡り、講堂の左右に連結される１塔１金堂式の伽藍配置である[17]。ただし、東南里寺址では木塔址が確認されておらず、出土遺物からみて泗沘遷都以後、最初につくられた寺院址と推測されているのみである。

現在発掘調査がおこなわれている軍守里寺址と陵寺、王興寺と定林寺は、上述の中心軸配置を採用している。益山の弥勒寺は、1塔1金堂の配置が三つの院で構成される特異なものであるが、依然として各院は1塔1金堂型式をしている。

したがって、百済寺院の配置方式は高句麗の寺院とは異なり、堂が塔と対等な関係で発展したことを意味するもので、このような配置型式は戒律主義と関連があると判断される。弥勒寺に現れる三院の型式は、寺の名前から窺えるように弥勒信仰の表現と推定されるが、依然として基本的な配置型式は、戒律主義の伽藍にみられる中心軸線を維持している。

3．新羅と統一新羅

法興王八年（521）に梁と国交を結んだ後、武帝が送った僧侶元表によって新羅王室に仏教が伝わった。ただし、訥祗麻立干（417～458）代には高句麗の僧侶である墨胡子についての記録があり、仏教公伝以前に仏教が入っていたと考えられる[18]。このことから高句麗や百済とは異なり、民間においてまず仏教が受容されたと考えられる。ただし、機会をみて王室に仏教を紹介したようにも理解され、結局王室仏教を志向した古代仏教の限界性をうかがうことができる。

以後、法興王十四年（528）の貴族との対立から、異次頓の殉教を経て、王室が仏教を公認するにいたり、その翌年には殺生を禁止する令が下される。そして、真興王五年（544）に新羅最初の寺院である興輪寺が建立される。

このように貴族との対立を経て公認された新羅仏教は、高句麗や百済とは異なり古代国家の理念と思想を統一し、国家発展を祈る護国信仰と現実求福的な信仰へと発展していった。すなわち、初期の新羅仏教においては弥勒信仰が流行していたと判断され、それ以後、留学僧などを通じて大乗仏教が紹介された後、慈蔵を中心とする戒律宗が流行し、国民思想の統一に大きな役割を果たした。また、円融思想に基づく義湘の華厳宗は、専制王権を中心とした中央集権的支配体制と符合したために、貴族社会において大きく繁栄した。

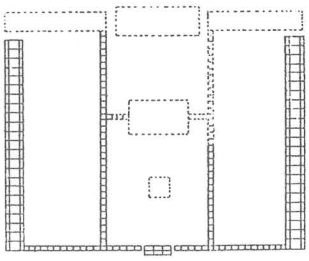
新羅における華厳思想の導入は、慈蔵に始まり、三山・五岳など土着的な山岳崇拝の固有信仰[19]と結合しつつ、華厳思想を基盤として新羅が本来仏国であったという仏国土思想を展開させていった[20]。

特に皇龍寺の創建が、唐から華厳思想を受容した慈蔵の建議によって建てられた塔であ

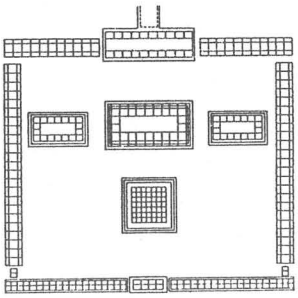
るという事実[21]と、唐から帰国した慈蔵を大国統に任命し、僧団の戒律を正させたという事実について注目する必要がある。なぜなら既存の円光法師の世俗五戒は、仏教に俗世的な意味を付与し、大衆化した傾向があったが、それに対する教学思想の後押しとして華厳思想の受容が必要となったのである[22]。

以後、文武王代に統一新羅が成立し、明朗法師の神印宗（密教の一派）が受容され、9世紀に入って禅宗が流入するにいたる。当時の留学僧たちによって展開された禅宗は、三国統一後から、次第にゆらいでいく統一新羅の、新しい精神的基盤となるのに十分であった。それまでの護国思想は、三国統一の達成によってその求心点を失い、貴族的な仏教に転換し、誰でも仏になれるという禅宗の趣旨は、不満を持っていた地方貴族や下層貴族にとって格好の精神的基盤となった。それまでは教学が主であった新羅の教壇に、参禅によって誰でも仏になることができるという思想が入るようになったのである。このような禅宗は、憲徳王十三年（821）に唐から来た道義と、興徳王代に帰国した洪陟によって南禅宗が伝えられた後、禅宗九山門が成立し、大きく繁盛した。しかし、王室や貴族社会には受け入れられず、混乱した新羅下代は高麗に取って代わられる。

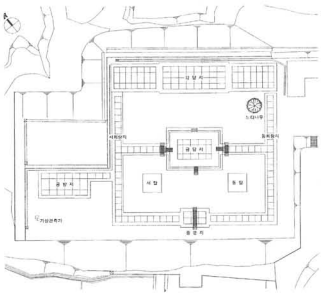
このように初期弥勒信仰から戒律宗、華厳思想と続く新羅で建立された寺院は、それらの宗教的論理と関係があったとみられる。



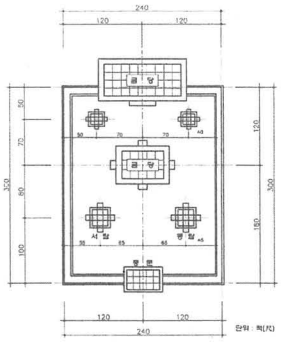
第6図　皇龍寺址1次伽藍



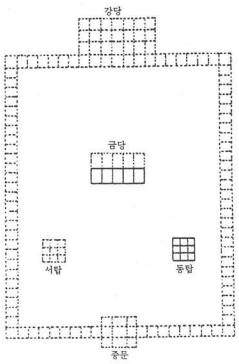
第7図　皇龍寺址2次伽藍



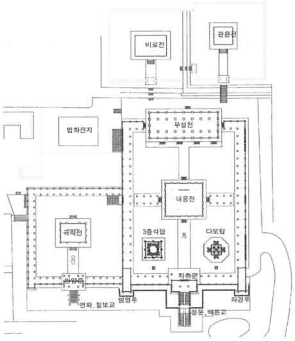
第8図　咸恩寺址



第9図　四天王寺址



第10図　望徳寺址



第11図　仏国寺址

最初につくられた興輪寺の初期伽藍配置は、中央の塔を中心として金堂と講堂、中門を南北一直線に配置したいわゆる１塔１金堂式伽藍と推定されている[23]。また、皇龍寺も、当初１塔１金堂の配置をしていたが、後に１塔３金堂の型式に転換された。三国統一を前後して、金堂の前に２塔が左右並んで配列される新しい型式の寺がつくられるようになる。

密教の曼陀羅的な配置にはじまると考えられる双塔の配置型式[24]は、百済の１塔式伽藍配置と比較して２塔式、または双塔式伽藍配置と呼ばれる。四天王寺、感恩寺[25]、望徳寺、千軍洞寺址、仏国寺など、これ以降建立される大多数の寺院は双塔を備えるようになり、このような型式は２塔１金堂の型式として全国に広まるようになる。後の禅宗寺院である実相寺、宝林寺などにもこのような配置型式が認められる。双塔は木塔ではなく石塔で、仏国寺三重石塔を基本とする典型的な型式が全国に流行すると同時に、その材質も木から花崗岩に変化した。

また、高仙寺のような東殿西塔の型式や、羅原里寺址や昌林寺址などでみられる前堂後塔の型式も確認されている。統一新羅の伽藍配置は、初期のものは王京内部の平地に位置するが、次第に山地に場所を移しながら、以前とは全く異なる新しい配置型式が現れるなど、一言で言い切るのが難しい。ただ、当時の伽藍配置は自然に順応する形態をとっているが、かなり積極的に山岳地形を平地化する傾向もある。

以上、初期新羅の寺院は、中門－木塔－金堂－講堂を軸とする中心軸線が強調され、木塔が最も強調される配置をしている。以後につくられる双塔式寺院は、１塔式に比べて塔が持つ意味が多少弱くなり、金堂の比重が大きくなったものと理解される[26]。

４．日本の古代仏教の特徴[27]と古代寺院

日本の仏教伝来は538年、または552年に百済の聖王が仏像と経論を伝えることによって始まる。以後、欽明天皇の代に仏教公認問題で物部氏と蘇我氏が対立し、結局天皇は仏教を公認した。この際、蘇我稲目は天皇に願って仏像を受け取り、飛鳥小墾田の家に安置してこれを崇拝し、向原の家を寺院にした。これが向原寺と呼ばれる日本最初の寺院で、奈良県明日香村豊浦に位置する。

仏教公認を契機として、蘇我氏と物部氏の対立は激しさを増したが、その間も韓半島から仏像と僧侶、経典が引き続き伝わり、信奉者も増えていった。用明天皇は、母が蘇我馬子の姉であった関係から仏教を信奉し、劣勢の物部守屋は軍を起こしたが、蘇我馬子によって滅ぼされる。これによって全ての権力は蘇我馬子に集中するにいたり、この時から聖徳太子が国民の思想を統一しようと大乗仏教を隆盛させようとした。

このように当時の日本仏教は、６世紀後半から７世紀初頭にかけて飛躍的に発展し、四天王寺（593）、飛鳥寺（596）、法隆寺（607）を皮切りに多くの寺院が建立された。また多くの留学生が大陸の仏教文化に直接接し、これを学習して帰国することで仏教文化が育成され

ていった。

しかし聖徳太子の死後、蘇我氏が専横を極め、太子の偉業は一時中断したが、天智天皇によって「大化の改新」が断行され、聖徳太子の精神を政治に活用しようとする傾向が生まれた。当時は律令政治がおこなわれるようになっていたが、仏教の慈悲・博愛の精神が普及し、仏教芸術と儀式、儀礼が発達し、これらを通じて仏教精神が高揚されるにいたった。

この時代の文化は白鳳文化と呼ばれ、飛鳥と奈良という二つの時代の中間的文化を形成している。白鳳文化の仏教は唐文化を受容しているところに特徴がある。この時代は前の時代より一層唐との交通貿易が活発になり、建築、彫刻、絵画においてもインド、イラン、ギリシャなどの手法が加味されている。また薬師寺・当麻寺などをはじめ多くの寺院が建立され、伽藍配置の様式も前時代と様式を異にする。

当時受容された仏教は三論宗が中心で、人間の本性を平等に捉え、階級の存在を否定する点で、聖徳太子の改革と「大化の改新」の理論的根拠にふさわしい論理であった。しかし、「大化の改新」以後、資本勢力が発生し、彼らは自らの論理を後押しするために、人性平等論の反対の人性差別論を台頭させ、法相宗の伝来とともに発展していく。貴族社会が強化されることによって法相宗が次第に発展し、三論宗がこれに圧倒される時代が奈良時代といえる。この時期の仏教は三論宗・法相宗以外にも、律宗・倶舎宗・成実宗・華厳宗などがあった。

そのうち、華厳宗は奈良時代に入って伝来したもので、無即有、一即一切の思想的特色をもち、一種の全体主義的哲学理論を主張していた。聖武天皇はこのような全体主義的な理論に基づき、国家の政治体制の確立を図り、中央政府以外に地方ごとに国府を設置し、中央と地方が相互依存する政治体制を確立した。すなわち、中央には毘盧遮那仏を安置した総国分寺を設置し、国府には釈迦仏を安置した国分寺を建て、国民精神の指導体制を整備した。中央の総国分寺が各地方の国分寺を総括する体系をつくり、華厳哲学の全体主義的原理を標榜した。

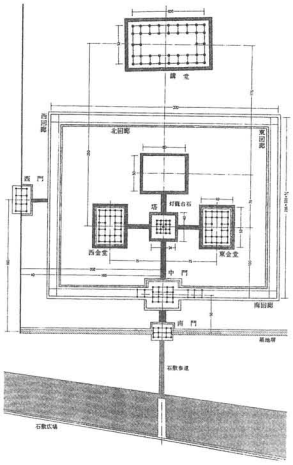
続く平安文化は、貴族社会を背景とした法相宗の全盛時代であった。初期に伝教大師最澄によって伝えられた天台宗と、弘法大師空海によって伝えられた真言宗は、その勢力を広げ、中期以降に完全に両宗派が仏教を支配するにいたる。

天台・真言宗は一乗仏教の思想に立脚して、人間の本性を平等に捉えることが特色であるのに対し、法相宗は五性各別を主張し、人間の本性は生まれながらにして五性類の差別があって、仏性を備えていない人間はいくら修行しても絶対仏にはなれないと主張した。法相宗は中期以降に貴族社会が没落するとともに、次第にその勢力を弱体化させていったのに対し、天台・真言宗は中期から次第にその勢力を伸張させ、強大な勢力を持つようにな

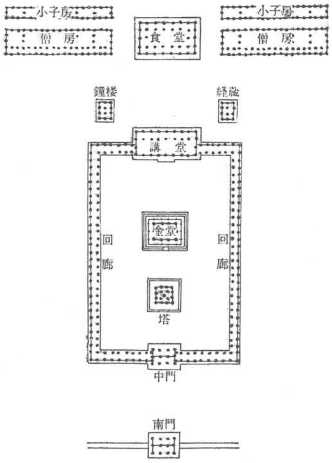
り精神的指導の面において絶対的な優位を占めるにいたった。

天台・真言宗はどちらも密教思想を基にしているため、平安文化は密教的な神秘主義が根幹をなしている。その後、中国との交通が減ったが、10世紀後半以降になって、中国で宋が建国し、再び交通が活発になる。この時期の中国文化は庶民文化が中心であり、結局中国文化の受容によって庶民文化が発達し、鎌倉文化を生む原動力となった。

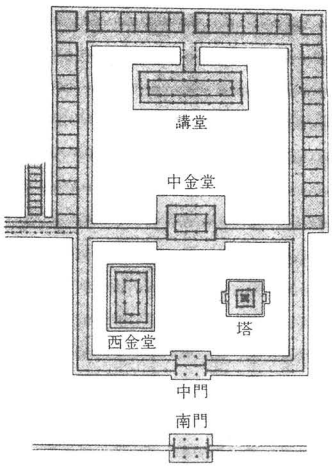
平安時代の仏教文化の特徴としては、奈良時代、およびそれ以前の寺院建築が都城を中心に建設されたのに対し、前期から中期においては都市仏教腐敗の反動から山岳仏教が興起し、静かな場所を選択して寺院が建立され、修行道場の設備をもつ寺院があらわれた。そして平安時代中期以降の浄土教の復興とともに、浄土教信仰の修行道場としての寺院が建立されるにいたる。またこのような建築は奈良時代のように中国の建築手法を模倣する



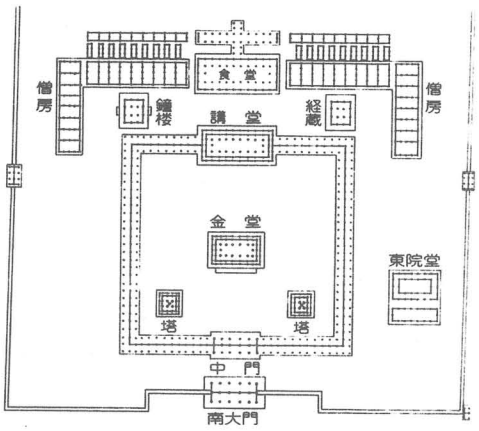
第12図　飛鳥寺址



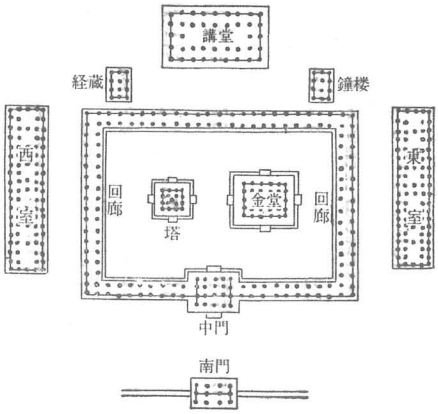
第13図　四天王寺址



第14図　川原寺址



第15図　薬師寺



第16図　法隆寺

のではなく、次第に日本独自の建築様式が発展し、いわゆる和洋折衷的な手法が生まれた。

日本の寺院は、仏教受容時から韓半島の影響を受けていた。初期の日本の寺院型式は、高句麗の金剛寺址で確認される1塔3金堂式伽藍の影響を受けたと推定される飛鳥寺と、軍守里寺址、陵山里寺址、定林寺址でみられる1塔1金堂の中心軸線をもつ四天王寺式であった。統一新羅の感恩寺などでみられる双塔式伽藍配置は、「薬師寺式伽藍」と呼ばれるが、この型式の最古の事例は本薬師寺である。これ以降、中国や韓国でみられない日本独自の伽藍配置型式が発展しながら、法隆寺式、川原寺式、法起寺式などの伽藍がつくられるようになる[28]。

Ⅲ．古代寺院の整備事例の検討

1．韓国の寺院

韓国の遺跡整備は、朝鮮総督府によって1907年になされた崇禮門の修理工事以降、平壌普通門、石窟庵、仏国寺など一部の遺跡が「修理」という名目で整備された。解放以降には緊急補修工事を通じて整備がなされ、1962年に「文化財保護法」が制定された。これ以降実施された遺跡整備は、おおむね文化財に対する解体修理工事で、1966年におこなわれた「顕忠祠浄化事業」をはじめ、主に護国遺跡を中心に総合整備がなされた。

1969年に仏国寺の復元事業がなされ、以降、総合開発計画という名のもとで発掘調査から整備までの一貫した実施が始まった。1995年には、地方自治制が実施され、文化遺産に対する観光資源化事業が広まりはじめた。2004年から「古都保存法」が制定され、古都の復元を目的とした保存整備事業が続けられている。世界文化遺産登録、各古都の見所づくりという目的から、整備事業も次第に空間拡張、大規模、自治体の利益極大化に観点が転換していき、慶州の皇龍寺木塔、月精橋復元、扶餘の定林寺址、弥勒寺址復元事業がおこなわれているところである。

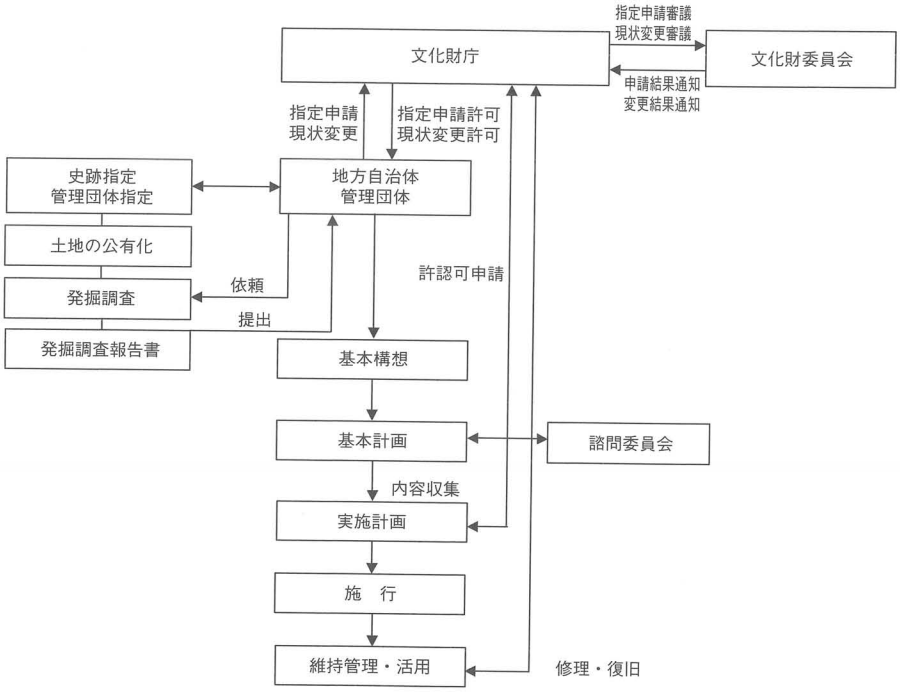
現在韓国でなされている保存整備手順は第1表のとおりで、大部分の整備事業がこのような手続きを通じておこなわれている。文化財庁、文化財委員会、地方政治団体あるいは管理団体の間でこのような流れで整備が実施されていて、このうち実際の整備計画は専門家によっておこなわれている。

本章でこれからみていく大部分の寺院の整備も、このような手続きでおこなわれている。

(1) 無塔式：扶餘東南里寺址

忠清南道の指道記念物第50号である東南里寺址は、扶餘郡扶餘邑東南里に位置し、指定面積は16318㎡である。1938年に1次調査が、1993年から1994年にかけて忠南大学校博物館によって発掘調査が実施され、塔と回廊がない独特な配置型式が明らかになった。したがって、特殊な用途の建物址と考えることもできるが、内部から蝋石でつくった仏像彫刻と

第1表　韓国における遺跡の保存整備の流れ

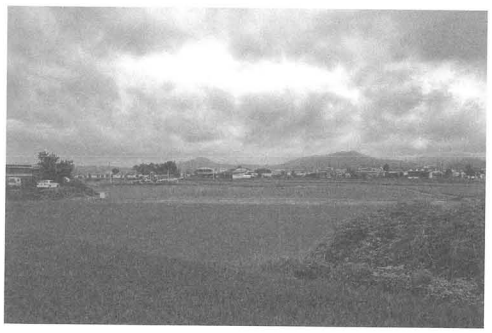


青銅製仏像彫刻が確認されており、寺址に比定されている。

現在の市内の中心から少し離れたところに位置していて、周辺は全て耕作地で鉄柵をめぐらし、その領域を表示しているが入口は表示されていない。中心建物址や建物の全体的な方向性を知ることのできるいかなる標識もなく、鉄柵の内部には雑草が生い茂っている。鉄柵前の道路によって、正面方向は認識できるものの、入口の案内板がなければ遺跡自体を見つけるのは難しい。

(2)　1塔3金堂式：平壌定陵寺址、慶州皇龍寺址

①　平壌・定陵寺址



第17図　東南里寺址遠景

第18図　入口の案内板

北朝鮮の国宝第173号である定陵寺址は、平壌特別市力浦区域龍山里に位置しており、総面積は30000㎡である。北朝鮮に位置しているため詳細はわからないが、中心区域の一部建物を若干東側に移し、1993年に復元工事がおこなわれた。

本来の木塔址には八角七重石塔を復元し、3金堂の場所に、中金堂には普光殿、西金堂には極楽殿、東金堂には龍華殿を復元した。回廊も復元し、内部領域を確実に区分していて入口の南門から、進入できるようになっていて正面性を強調している。

② 慶州・皇龍寺址

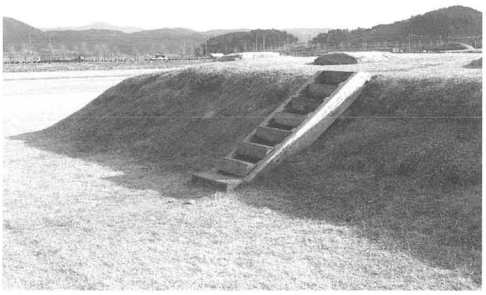
史跡第6号に指定された皇龍寺址は、慶尚北道慶州市九黄洞320-1番地に位置していて、指定面積が380087㎡の新羅時代の代表的な寺院である。

真興王代である569年に一次的な寺域造成を終え、584年に丈六尊像を安置した中金堂と、東・西金堂を完工した。以降、善徳女王代である645年に九重木塔を造成し、全体的な構成が完了した。その後、蒙古の侵入で高麗時代である1238年に完全に焼失した後、再建されずに次第に民家と耕作地になり、近年まで放置されていた[29]。

1966年に心礎石に対する調査が初めておこなわれ、1969年に皇龍寺址の規模の確認と学術資料確保のために、文化財管理局と梨花女子大学校博物館が共同で講堂址の一部を調査した。その後、1976年から1983年にかけて発掘調査がなされ、その実態が明らかになって

第19図　定陵寺址全景

第20図　復元された普光殿



第21図　皇龍寺木塔址の毀損した盛土面と階段

第22図　芬皇寺からの進入

いった[30]。

1981年からは継続的な整備事業を通じて、現在のような姿に整備された。内部の建物址は基壇を整形した後に盛土して、芝生を敷き、礎石のある場所は露出して展示している。木塔址も発掘調査後、覆土し、芝生を敷いたが、当初は階段がなかったため、傾斜面の一部が毀損した。最近、別途の階段施設を設置した。ただ、現在の皇龍寺址は側面や逆方行から進入するため、木塔址の全体的な位置はそれほど明確ではない。また、皇龍寺址の整備で使用された芝生は、以後、慶州を含めたいくつかの遺跡整備で使用されたが、おびただしい管理費用がかかり、維持において問題を抱えている。

側面進入や逆行進入は、皇龍寺がもつ中心軸線の把握を困難にし、同時に寺域全体の明確な境界設定がなされず、領域が不分明に区画されているため、観覧客の大部分は南門址や鐘楼、経楼址まで行かない。進入路と金堂址周辺の通行路は、真砂土で舗装されている。

1999年から慶州市では、「皇龍寺址遺物展示館」建設のために芬皇寺東辺に敷地を準備し、発掘調査に着手した。しかし、ここで九黄洞苑池が確認され、現在のところ遺物展示館の建設自体が不透明である。

ひとつ惜しい点は、皇龍寺址の進入が、狭い道路に設置された小さい案内板を見ながら進み、かつての国立慶州文化財研究所を過ぎて、金堂址と木塔址の間を進入していたものが、国立慶州文化財研究所が閉鎖され、芬皇寺前に大きな駐車場が設けられたことから、寺院の本来の進入方向から逆方向に進入しなければならなくなったという問題点を持っている。これによって、本来、皇龍寺址がもつ正面性や中心軸線などを体験することが一層難しくなった。

(3) 1塔1金堂式：扶餘定林寺址

史跡第301号である定林寺址は、忠清南道扶餘郡東南里254番地に位置し、指定面積は59242㎡である。扶餘の都心に位置していて交通の便がよく、寺域内には国宝第9号である定林寺址五重石塔がある。創建時期は正確に分からないが、おおむね百済の泗沘遷都後である6世紀中～後半と推定され、以後高麗時代である1028年に重建された。

発掘調査は日本による植民地統治時代にはじめて実施され、以後1979年から1980年まで忠南大学校博物館によって寺址全域に対する調査が実施され、1992年には圓光大学校博物館が保護閣建設のために講堂址を調査した。寺域に対する発掘調査が完了した後、苑池に対する調査を1980年から1984年まで忠南大学校博物館と扶餘博物館が共同でおこなった。

寺域の整備は1982年から1986年と、1987年から1996年にかけて実施された。整備内容は遺構整備、および塀設置、排水路、案内板設置などで、特に1993年には石仏保護閣が別途に設置された。建物址の整備は、芝生敷きで垣根に取り囲まれており、寺域の正確な範囲の把握が可能である。

石塔の場所は発掘調査の結果、木塔址という意見が提示されもしたが[31]、現在では真否は分からない。保護閣がつくられる前は、石塔が寺域全体からはっきり確認されたが、保護閣建設以後、背景に調和してその強調度は落ちた。しかし、石塔と保護閣が視覚上連結されることで中心軸線はむしろ強調された。

2006年には定林寺址博物館が建設され、それまで中心軸上に位置する南門から入っていたのが、博物館の広場を通って迂回して進入するようになり、正面性は落ちた。ただし、最近国立文化財研究所によって定林寺址整備事業[32]が完了し、今後、寺院全域が復元されれば、このような正面性は再び蘇るものと判断される。

(4) 3院構成（1塔1金堂式）：益山弥勒寺址

史跡第150号である弥勒寺址は、全羅北道益山市金馬面箕陽里32-2番地に位置し、規模は13384699㎡である。龍華山を背景に南向し、国立文化財研究所と国立扶餘文化財研究所によって1974年から2000年まで発掘調査がなされ、1塔1金堂、3院型式の伽藍配置をはじめとして数多くの調査成果を蓄積した。百済の武王代、7世紀初めにつくられ、17世紀頃閉鎖されたものと推定される[33]。

弥勒寺址の整備は1972年の幢竿支柱の補修に始まり、現在も国立文化財研究所によって石塔が補修整備されている。主要建物址の整備は、基壇石を整備したのち盛土して芝生を

第23図　定林寺址全景

第24図　定林寺址博物館

第25図　弥勒寺金堂の整備と復元された東塔

第26図　遺物展示館

敷いた。礎石が残っている部分は、礎石の上部を露出して展示している。各建物址の間は真砂土で舗装し、歩行路をつくり、一部木材で観覧路を設置した。

弥勒寺址の整備で特に注目されるのは、1993年に復元された東塔である。当時の多くの部材が確認されたものの、使用部位のわかる事例は極めて少なく、現代式に新しく塔を復元したが、その様式と形態については現在まで意見の一致をみない。ただし、現在残っている韓国の古代寺院址で、建築物（建造物）を復元した事例として後代まで残るものであり、今後このような復元作業は慎重におこなわれなければならないことを示している。

弥勒寺址は南向した正面広場に大型駐車場があり、1997年に開館した弥勒寺址遺物展示館が寺址の西辺に位置している。このため大部分の訪問客は遺物展示館が位置している西辺から入り、観覧路に従い西塔を過ぎてから中心区域に入ることになり、定林寺址と同様、本来の空間感と象徴性を十分に蘇らせてはいない。

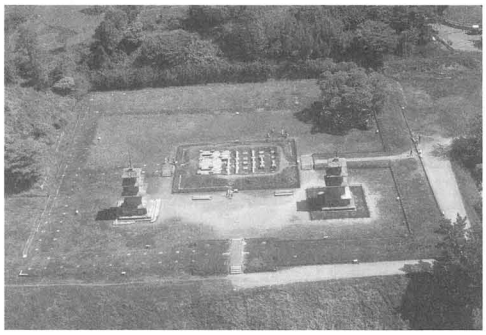
(5) 2塔1金堂式：慶州感恩寺址

史蹟第31号である感恩寺址は、慶尚北道慶州市陽北面龍当里一帯に位置していて、規模は3580㎡である。新羅第30代文武王代に創建されはじめ、682年に重建された寺院である。

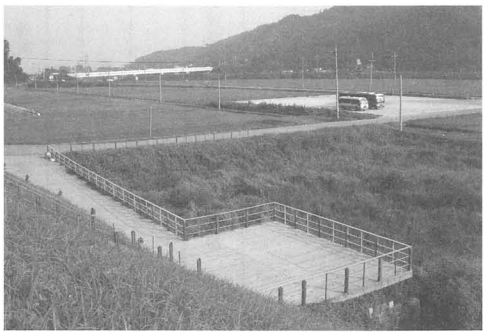
創建後、高麗末までは寺勢が維持されたようだが、以後衰退し、雑草が生い茂った廃寺となった。発掘調査は1959年に金堂を中心とした伽藍配置確認のための1次調査が始まり、1979年の2次調査と1982年度の3次調査を通じて寺域の全体的な調査を完了した。

寺域に対する整備は、1971年と1980年から1981年まで鉄柵および案内板工事、石築および排水路などの整備がおこなわれた。1982年と1998年には寺址の中心遺構を整備し、1997年には進入路と駐車場を設置した[34]。2004年には各建物址を連結する木材デッキが設置され、2006年には中央からの進入が可能なように傾斜地に階段とデッキを設置し、入口にも大型駐車場を設置して観覧の便宜性を図った。

建物址別に細かく整備内容をみていくと、金堂址は基壇の面石を立てて外郭部を盛土したのち芝生を敷き、基壇の内部は下部構造を露出させて整備した。講堂址も基壇部を整備して、礎石を露出させた後、芝生を敷いた。中門址と回廊址は講堂址と同様の整備をした



第27図　感恩寺址整備の全景



第28図　中央進入階段および駐車場

が、一部分は盛土をして芝生を敷いた。また、金堂址と回廊址の周辺には、木の杭を打ってロープを結んだ進入防止用の柵を設置して建物址周辺を保護した。

感恩寺址の整備も芝生敷きが中心で、皇龍寺址と同じく管理に困難がある。2006年までは金堂址の側面から入っていたのが、現在は正面中央部から入れるようになり、以前の進入方法よりはるかに改善された。これは進入時に2塔1金堂のうち、金堂が一番先に視角に入るように配慮したものと判断され、このような方法によって、感恩寺がもっている本来の空間感を忠実に感じることができると判断される。

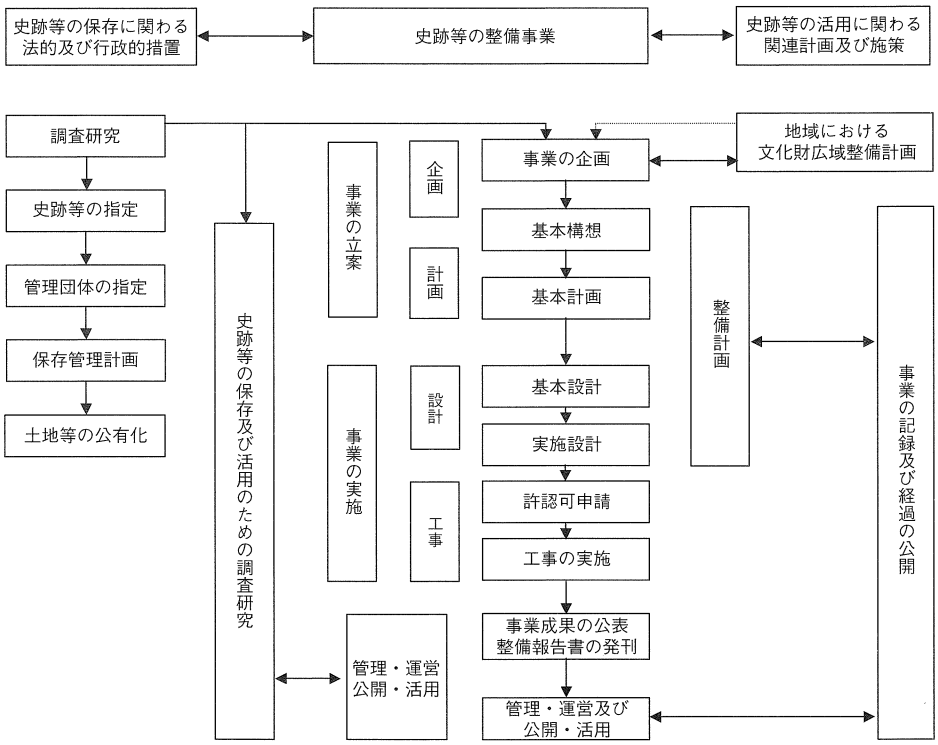
2．日本の寺院

日本の遺跡整備の基本法令である「史跡名勝天然記念物保護法」は、1897年に制定された「古社寺保存法」を母胎として1919年に制定された。産業発展にともなう破壊に対する保存が中心のこの法律は、1950年にいくつかの法律と統合され、「文化財保護法」が制定された。

このような「文化財保護法」の基本原則は保存を主とするもので、本格的な整備事業は1960年代から全国における大規模な発掘調査にともない、「風土記の丘」事業をはじめとして全国の良く残っている古墳と寺址を中心に開始された。

この流れは1990年代に入り、「ふるさと歴史の広場」事業がはじまり、文化庁の方針が、

第2表　日本における遺跡の保存整備の流れ



遺跡内で制限されていた表現を一般市民により分かりやすく理解させるための建物の復元を許容する方向に転換した。その後、全国各地で復元がおこなわれはじめ、現在は平城宮大極殿も復元されている。

日本の古代寺院の事例については、日本の伽藍配置型式に基づいて、飛鳥寺式、四天王寺式、薬師寺式、法隆寺式、川原寺式の整備事例を分析し、それぞれの遺跡整備について検討していこう。

(1) 飛鳥寺式：飛鳥寺

奈良県高市郡明日香村に位置し、蘇我氏の個人的な寺院であり、かつ日本最古の寺院である法興寺の後身である。593年に塔の心礎に仏舎利を奉献し、596年頃に完成した。飛鳥寺式と呼ばれる伽藍配置は、1塔を中心に東・西・中の3金堂が配置されたもので、高句麗の清岩里寺址と類似するが、瓦当の文様は百済の瓦当文様と類似する。606年に鞍作止利が作った釈迦如来像（飛鳥大仏）が現在も金堂の中に安置されている。1955年に発掘調査がなされ、1966年に国の史跡に指定された。

本来の中金堂址には、江戸時代に建てられた本堂があり、それが現在では主仏堂の役割をしている。また、現在の本堂に連なる建物には、発掘調査当時の写真や遺物などが簡単に展示されている。塔址は心柱の位置に杭を打って表示してある。講堂址には民家が建っており、一部発掘調査がなされているようである。垣で囲まれた内部は整備されているが、東・西金堂の場所は垣の外に位置していて畑として利用され、個人所有財産に対する問題が日本にもあることがわかる。

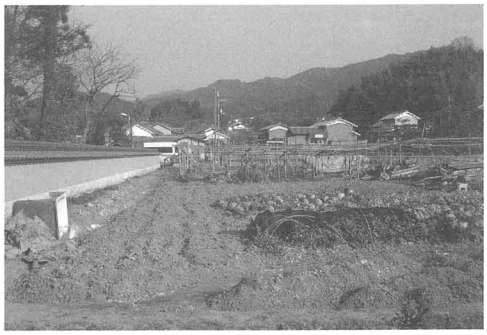
江戸時代に個人に所有権が移ったようである。現在は有料で運営されていて、入口で入場料を取っている。

(2) 四天王寺式：四天王寺・山田寺址

① 四天王寺

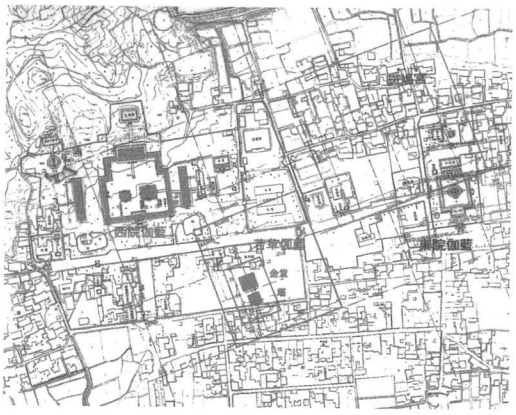
大阪市天王寺区に位置していて、聖徳太子が建立した七大寺院中の一つとして知られている。『日本書紀』によれば593年に建てられはじめた。この四天王寺は蘇我馬子の法興寺

第29図　飛鳥寺木塔址の表示木



第30図　畑に利用されている東・西金堂址

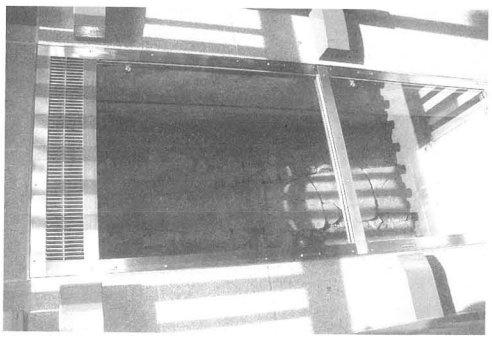
（飛鳥寺）と比較されるが、これは王室寺院と貴族寺院の対立という側面からそれぞれ建立されたためである。伽藍配置は各建物址が南から北に一直線上に配置する四天王寺式伽藍配置で、法隆寺の前身である若草伽藍の配置も四天王寺式として知られている。古代から幾度もの火災をへて、今の中心伽藍は第二次世界大戦後に発掘調査がおこなわれ、1957年から1963年にかけて鉄筋コンクリートで完全に復元された。当時、設計は「四天王寺伽藍復興建築協議会」が担当し、1965年には日本建築協議会賞を受賞もした。



第31図　若草伽藍位置図

当初、遺構の大部分は盛土され、地下に埋まっていたが、東門址だけ遺構をガラス張りにして一部展示している。東門の外郭には宝物館を別途建設して、主要遺物などを常設展示している。西門周辺の龍井は保護廓を別途につくってある。復元された建物址の間は真砂土で舗装されているが、別途に観覧導線を設けて訪問客を誘導している。四天王寺も飛

第32図　四天王寺全景


第33図　東門址の展示遺構

第34図　山田寺の案内板

第35図　整備された金堂・木塔址

鳥寺と同じく入場料金を取っており、それ以外に宝物館も別途の入場料を徴収している。

② 山田寺址

奈良県桜井市山田に位置する。蘇我倉山田石川麻呂が641年に造営を開始した個人的な寺院で、11世紀の火災によって廃れたと推定されている。中門―塔―金堂―講堂が南から北に一直線をなす四天王寺式伽藍配置である。発掘調査による東回廊の連子窓の発見により、法隆寺より古いことが明らかになり、回廊の礎石と講堂址出土の銅板五尊像、その東側出土の宝蔵址などが確認された[35]。発見された東回廊の窓は、近くに位置する飛鳥資料館に復元されている。

発掘調査以後、史跡公園に整備され、北側道路にそって講堂址北側に駐車場が設けられ、北側から南側に下りつつ、回廊址と宝蔵址をみて、南門から入る形式となっている。特に、講堂入口には復元図が描かれ、一般の人の理解を助けている。建物址はおおむね80cmほど盛土した後、その上に他の遺跡とは異なり、礎石位置を表示せずに芝生を敷いている。代わりにそれぞれの建物址前には発掘調査当時の写真と説明が書かれた陶製の案内板があって、本来の姿を想像できるようにしている。木塔址、金堂上面に上がる階段は古く、使用困難な状態ではあるが、壁体が出土した回廊区域は比較的詳細に下部構造が表現されている。外郭にはコンクリートで排水路を設置し、内部の水を排水していて、韓国の排水施設とは多少異なる。

現在、山田寺址は文化庁が管理しているが、講堂址北辺に山田寺という現代の寺院が位置していて、管理や遺物の国家帰属問題が円満に解決していない場合がある。

近くに飛鳥資料館が位置し、飛鳥地域の遺構や出土遺物についての常設展示がされていて、特に山田寺の壁体を復元して展示している。

(3) 薬師寺式：本薬師寺址・薬師寺

① 本薬師寺址

橿原市城殿町に位置し、694年に完成した藤原京条坊内の東南部に建立された。『日本書紀』によれば、680年代に天武天皇が皇后（後の持統天皇）の病の治療のために発願して建立したとする。1952年に特別史跡に指定され、現在は橿原市教育委員会が管理している。

1976年から始まった発掘調査で１塔２金堂式の伽藍配置が確認され、特に、710年に移建された薬師寺とほぼ同じ規模、大きさが確認されたが、中門と回廊には差異があることも明らかになった。移建後も10世紀頃までは存続したが、その後廃寺となった。現在、金堂址に本薬師寺という小さい建物が法灯を維持しているが、本遺跡とは特に関係もないという。奈良の薬師寺と区分するために前に「本」の字をつけている。

金堂の礎石は、現在の本薬師寺の庭に露出展示されている。本来私有地であったため、このように金堂址の中に建物が入ってしまったとのことで、日本では私有地の発掘調査は

住民の許可を得ておこない、その結果によって敷地を買入、整備をおこなう。西塔址は傾斜面を整備後、芝生を敷いて上面に心礎石を露出させている。東塔址は心礎石とそのほかの礎石が露出していて、その領域は低い潅木を植えて示している。外部は傾斜面を整備した後、芝生を敷いている。しかし講堂址と推定される地域は、現在民家が位置していて発掘されないまま現状を維持している。

全体的な寺域内部は、建物址を除けば耕作地となっていて、別途の観覧導線は設けられていない。

② 薬師寺

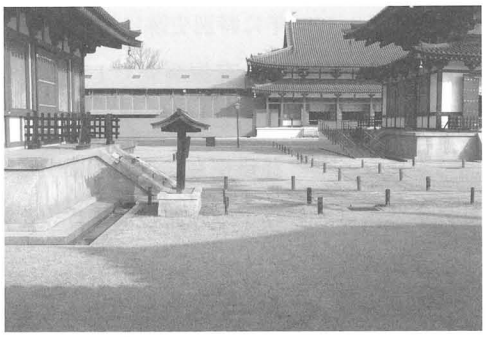
奈良県奈良市西ノ京町に位置していて、1998年にユネスコ世界文化遺産に登録された。710年に平城京遷都にともなって、本薬師寺が飛鳥から平城京の現所在地に移転されたものである。

伽藍配置は本薬師寺と同じく中央に金堂をおき、金堂の前に東・西双塔を、金堂の後に講堂を、そして一郭を巡る回廊を配置している。しかし973年の火災、1528年の筒井順興の兵火で多くの建物が焼失した。そのため当時の建物は東塔を残すのみである。1960年代以降「白鳳伽藍復興事業」が進められ、1976年に金堂が再建されたのを皮切りに、西門、中門、回廊、大講堂などが順次再建された。当初金堂址には18世紀の建物があったが、今は

第36図　現在の本薬師寺址および金堂の礎石

第37図　東塔址

第38図　薬師寺全景



第39図　境内の歩行路

興福寺に移され、現在は臨時の金堂として使用され、過去の建物をそのまま活用する事例となっている。注目されるのは、このような復元事業が国家予算ではなく本寺院自体の予算でおこなわれていることである。

各建物址は歩行路があって、訪問客を誘導している。東塔の構造安全問題のため、2009年から解体修理する予定になっている。入口では入場料を徴収している。

(4) 法隆寺式：法隆寺、吉備池廃寺

① 法隆寺

奈良県生駒郡斑鳩町に位置する。本来、現在の法隆寺前にあった若草伽藍の創建が607年であるが、670年に焼失した後、今の法隆寺が再建されたとされる。

現存する世界最古の木造建築物である金堂、五重塔などがある西院と、夢殿などがある東院に区分され、その中間地域に展示館である大宝蔵院が位置している。特に西院は木塔と金堂が並列配置されていて、後ろに講堂が、その周辺を「凸」字形回廊が巡っている。全て国宝に指定されている。1993年には法隆寺の建築物群が法起寺とともにユネスコ世界文化遺産に登録された。

法隆寺地域の国宝･重要文化財建造物は、「奈良県文化財保存事務所法隆寺出張所」によって主管され、1895年から今まで学術的調査を実施しながら、その結果にもとづいて必要な保存修理を持続的におこなっている。同時に修理後余った木部材も全て保管して、当時の建築技術や構造技術などに対する調査研究を継続している。

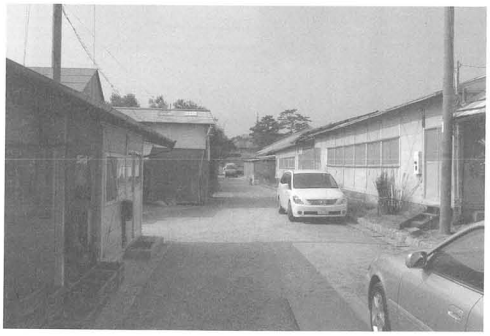
法隆寺は既存の建築物群が残っているため、新たに整備するというよりは持続性をもった維持補修という性格が比較的他の遺跡に比べて明確である。また展示館、茶室などの運営を通じて、訪ねてくる訪問客に観光の場と休憩の場を提供し、入場料を徴収している。

② 吉備池廃寺

奈良県桜井市吉備に位置している。1997年の発掘調査の結果、639年に舒明天皇によって建てられた百済大寺と推定され、最も古い法隆寺式伽藍配置である可能性が高い。

金堂と塔の両基壇間の距離は84.6mで、吉備池廃寺の塔が大官大寺の塔基壇と似た規模の

第40図　法隆寺金堂と木塔



第41図　奈良県文化財保存事務所法隆寺出張所

九重塔であった可能性が考えられている。なお回廊は一辺100m以上である。発掘調査によって出土した瓦当の量が少なく、短期間の運営と判断されている[36]。

現在の吉備池は300年前につくられたとされ、その前に位置する金堂址と木塔址は若干高く覆土され、その位置をわずかに知ることができる。しかし、それさえ藪が生い茂って長い間管理されていないものと判断される。寺院址の位置も、アパートや工場が近くにあって、他の寺院址とは異なり接近が容易ではない。

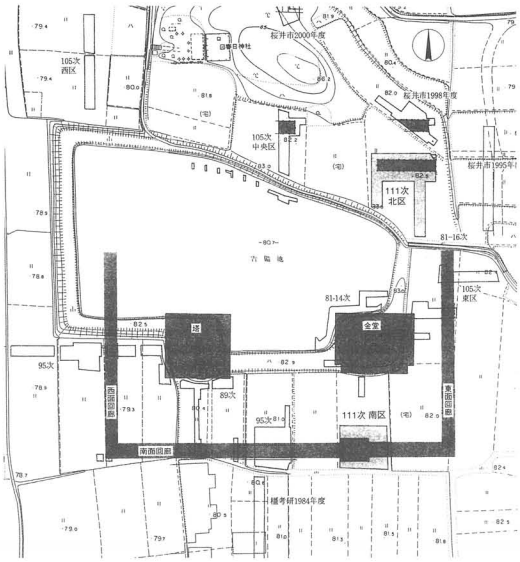
(5) 川原寺式：川原寺址[37]

奈良県高市郡明日香村に位置していて、1921年に史跡に指定された。指定面積は55569㎡で、7世紀後半に創建された。下層に川原宮と推定される遺構が残存している。1957年からはじまった発掘調査で1塔2金堂という独特な伽藍配置が確認された。

道路を間に挟んで向かい側に橘寺があり、門址を過ぎると塔址と西金堂址が並列して位置している。門址と連結された回廊址はFRPを使用して礎石の複製品を床面に置いており、一部上面は三和土で舗装した。回廊址は整備された時期によって傾斜面が形成されている。

塔址は本来飛鳥時代の建築物で、もともとは地下に心礎石があったとされるが鎌倉時代に改変されたとする。基壇部は凝灰岩を使用し、新たに復元していて上面には心礎石と四天柱礎石、側柱礎石を設置しその位置を標示した。側柱礎石（外陣）の外側は、板石で床面を舗装している。

西金堂址は基壇部を整備し、その上部は盛土して芝生を敷いた。西金堂址と連結された



第42図　吉備池廃寺遺構配置図

第43図　木塔址

第44図　金堂址

回廊址は礎石を設置し、上部面の一部を三和土で舗装した。

(6) 無塔式：三河国分尼寺址[38]

国分尼寺は、奈良時代である741年に聖武天皇が発願した「国分寺建立の詔」によって、各地域に国分寺として建てられた。三河国分尼寺址は三河の国衙に近い八幡台地の東北端に位置している。

1967年に実施された発掘調査の結果、金堂の礎石などが発見され、南北一直線に並んだ伽藍配置が確認された。寺域は全国の国分尼寺址中で最大規模である。また南側の中門から北側の講堂に続く複式回廊は、他に類例を探すことができないものである。史跡公園として整備され、2005年にオープンした。

整備内容は南側の正面性を基本として、中門と回廊の一部は建物を復元し、金堂址・講堂址・経蔵址・鐘楼址・回廊址・尼坊址・南大門などの建物址は平面的に標示した。南大門に取り付く築地は、植物を植えて標示した。

活用的な側面では南大門に近接して、教育･学習施設を設置し、中央伽藍の南西側には国分寺址および国府址を含めた地形縮小模型を設けている。

これ以外にも日本では、法起寺式、観世音寺式などの伽藍配置をもった寺院址があるが、本稿で扱う整備事例に該当しないため除外した。

第45図　川原寺址全景

第46図　木塔址

第47図　三河国分尼寺復元された中門

第48図　回廊址の整備

第3表　韓国における古代寺院の類型による整備の分析

寺院類型	対象寺院	整備内容	備考
1塔3金堂式	定陵寺址	○一部の建物を東側に移築復元 ○本来の八角木塔は八角七重石塔に復元 ○3金堂は普光殿(中金堂)、極楽殿(西金堂)、龍華殿(東金堂)として復元	○塔を復元、その象徴性を蘇らせる
	皇龍寺址	○建物址：基壇整備後、盛土、芝生敷き(礎石露出) ○通行路：真砂土舗装	○特色のない単純な保存重視の整備 ○各遺構の形態把握可能 ○寺域全体の境界が不明確で認識が難しい ○北側に駐車場があるため北側から進入 ○南側進入用の導線は修正が必要
1塔1金堂式	定林寺址	○塔は既存の石塔が存在 ○金堂址は芝生を敷いて遺構標示 ○金堂址は高麗時代石仏保護廓建立 ○苑池復元整備	○金堂址・回廊址の礎石位置未標示 ○講堂址の保護閣によって1塔1金堂がみせる視覚的正面性弱化 ○展示館建設によって迂回して進入
	弥勒寺址	○中院金堂址：基壇部整備後、盛土、芝生敷き ○東院・西院金堂址：基壇面石整備 ○木塔址：二重基壇形に盛土した後、芝生敷き ○回廊址：基壇部整備、盛土後芝生敷き ○講堂址：基壇部整備、内部盛土後、芝生敷き ○門址：基壇部整備、盛土後芝生敷き ○東塔復元、西塔は解体修理中 ○各建物址の階段再整備	○基壇部整備(礎石露出)と芝生敷き ○単純な保存中心の整備 ○東塔の復元は空間的理解の一助に ○芝生敷きの風化現象が深刻 ○露出した礎石が時間の経過によって沈下 ○展示館の位置の関係で、偏向進入
2塔1金堂式	感恩寺址	○中央進入可能(階段とデッキ設置) ○金堂址：外郭部整備後、芝生敷き 内部遺構露出整備 ○講堂址：基壇部整備後、芝生敷き(礎石露出) ○中門址・回廊址：基壇部整備後、芝生敷き ○各建物址間にデッキ設置により探訪導線誘導 ○木塔址：二重基壇形に盛土した後、芝生敷き ○回廊址：基壇部整備、盛土後芝生敷き ○講堂址：基壇部整備、内部盛土後、芝生敷き ○門址：基壇部整備、盛土後芝生敷き ○東塔復元、西塔は解体修理中 ○各建物址の階段再整備	○基壇部整備と芝生敷きによる保存を中心とした整備 ○既存の迂回進入を中央進入に転換、空間感体験極大化

3．小　結

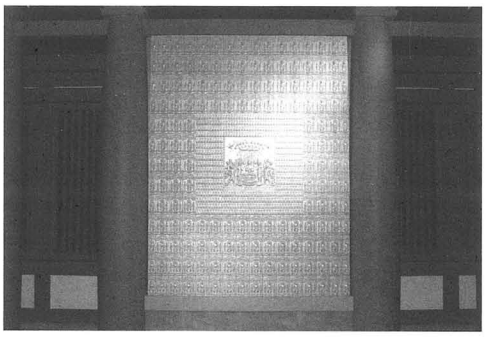
以上、韓・日古代寺院を形式別にわけ、整備内容を検討し、古代伽藍の特徴を基準にみてきた。その結果は次のように整理することができる。

韓国の遺跡地の整備は、発掘された遺跡の保存による整備が大部分を占めていて、その方法は基壇部把握、礎石露出展示、芝生敷きなどである。例外的に北朝鮮の定陵寺址は主要建物群を復元したが、これは北朝鮮の特殊な事情によるものと判断される。韓国で古代建物に対する復元は弥勒寺址東塔の復元によってわかるように、まだ古代建物の復元と関連して議論の余地が残っている。ただし、最近、古代建築の研究が進展してきており、今後その研究成果を通じてより忠実な古代建築物の復元も可能であろうと判断される。

日本の場合、韓国と類似した整備事例もみられるが、同じ遺跡地内においても韓国より多様な方法で遺構の標示をしていて、復元事例も多い。また一部の寺院で古代寺院の主要要素である塔、正面性、中心軸線などが活かされた整備がなされている点は、韓国の古代寺院址整備においても今後、考慮しなければならない点と判断される。

第4表　日本における古代寺院の類型による整備の分析

寺院類型	対象寺院	整備内容	備考
飛鳥寺式 (1塔3金堂式)	飛鳥寺	○塔址：心礎石の位置に杭標示 ○中金堂址：礎石露出後、真砂土舗装 現金堂の庭として利用 ○東西金堂址：畑として利用	○全体が未整備で寺域の把握困難 ○塔址は杭だけで、木塔址であることは認識困難 ○寺域進入は西側、既存の方向性毀損 ○畑として利用されている東西金堂址は毀損の危険性あり ○個人寺院の運営で復元整備不可能 ○入場料有
四天王寺式 (1塔1金堂式)	四天王寺	○遺構全体覆土後、主要建築物をコンクリートで復元 ○そのほかの付属建物は木造建物 ○ガラスによる地下遺構の展示	○寺域全体を古代の姿に再現 ○本来の進入方向から進入 ○現在も宗教寺院として運営 ○入場料有(展示館入場料別途)
	山田寺址	○主要建物址は盛土後、芝生敷き ○回廊址：基壇整備後、礎石と壁石再現 ○南門址：杭とロープで進入誘導 ○寺域内部は磨砂土舗装	○芝生敷きを通じた保存中心の整備 ○寺域全体が整備され認知性容易 ○各遺構案内板は説明と発掘写真挿入 ○北側道路により進入は反対方向
薬師寺式 (2塔1金堂式)	薬師寺	○東塔を保存し主要な建築物復元	○徹底した復元によって認識性良好 ○進入も本来の南門から進入 ○入場料有
	本薬師寺址	○金堂址：礎石は露出、他の建物の庭として使用 ○西塔址：傾斜面整備後、心礎石露出、芝生整備 ○東塔址：傾斜面整備後、礎石全体露出後、芝生敷き ○講堂址：民家によって未発掘状態、現状維持	○境界不在で認識性低い ○木塔址は芝生敷きを通じた保存中心の整備
法隆寺式 (東殿西塔式)	法隆寺西院	○1895～1985の間、学術調査の実施、及び持続的修理	○持続的修理によって本来の姿維持 ○アジア古代建築研究に資料提供 ○入場料有
	吉備池廃寺	○建物址覆土後、芝生敷き	○私有地に囲まれ認知性低い ○発掘調査後、覆土によって最小限の整備
川原寺式 (東殿西塔式+中金堂)	川原寺址	○中金堂址：現寺院の前庭に礎石だけ露出 ○塔址：基壇部復元、及び礎石露出 ○西金堂址：基壇部整備後、芝生敷き ○僧坊址・回廊址・門址：複製礎石設置、および上面三和土舗装	○主要建築物復元を通じて遺構表現の性格強い ○現寺域によって寺域全体の把握は困難 ○周辺が開放され南面からの正面進入
その他 (無塔式)	三河国分尼寺址	○中門・回廊は復元 ○主要建物址は礎石露出による平面標示 ○南大門の築地は植物を植えて標示	○中門・回廊復元によって正面性強調 ○古代寺院進入方式を復元 ○主要建物址は認知可能で認識性良好



第49図　夏見廃寺展示館内の金堂復元模型

第50図　夏見廃寺の金堂址

また、韓国や日本の展示館の機能については、遺構の紹介と出土遺物の展示など基本的に同じといえる。しかし、日本の展示館は、飛鳥寺のように現在の本堂に連なっていたり、四天王寺、法隆寺のように別棟を運営、もしくは山田寺址のように地域展示館など多様な方法で運営されている。また本稿では論じなかったが、夏見廃寺展示館のように内部に金堂を1：1で復元した模型の展示は、展示館のまた違った役割に対する一つの方法を提示しているものと判断される。このように日本の展示館の位置は、おおむね本来の寺院がもっている中心軸線や正面性と対立せずに、その横に位置する場合が大部分である。しかし、韓国の展示館はおおむね寺院の正面に建設され、本来寺院がもっている中心軸線や正面性を毀損している場合があり、展示館建設位置は慎重に判断せねばならないであろう。

Ⅳ．おわりに

以上、韓日古代仏教の流れを把握し、古代寺院の成立についてみてきた。これは韓日古代寺院の特徴を抽出し、このような特徴が韓国と日本の整備にどのように適用されてきたのかについて検討するためでもあった。

それぞれの整備事例を通じて、① 古代寺院の特徴をどのように整備に活用しなければならないのか、② 整備の手法はどのようなものがあるのか、③ 整備の問題点は何か、④ 今後の整備においてすすむべき方向性とは何か、について検討し終わりとしたい。

① 古代寺院の特徴をどのように整備に活用しなければならないのか

韓国の古代仏教を通じて寺院建築の特徴をみていくと、高句麗は、塔が中心となる空間観をもっていて、宗派としては三論宗が優勢であった。百済は、塔と金堂、講堂のもつ中心軸線が強く強調され、宗派としては戒律信仰と弥勒信仰が優勢であったと判断される。新羅は、統一前後で伽藍配置が異なるが、現存する事例は皇龍寺を除いておおむね双塔と金堂からなり、庭中心の空間が強調され、宗派としては初期の弥勒信仰から戒律宗、華厳思想を経て統一以後、密教、禅宗など多様な宗派が併存したものとみられる。日本の寺院建築は、初期には韓国と類似した配置方式が現れるが、その後、日本だけの独自の伽藍配置形態が盛行する。

このように、三国や日本がもっている寺院の特徴には少しずつ差異があるが、基本的に木塔と金堂の構成によって正面性が強調され、中心軸線を浮かびあがらせる建築的特徴をもっている。日本の整備事例においては、このような特徴を活かし、中心軸線上に存在する建築要素を強調しつつ整備された事例がみられた。しかし、韓国の古代寺院においてはこのような中心軸線上を活かした整備は探すのが難しく、むしろ展示館などの建立のために進入方法が変更され、正面性さえ強調していない場合がある。したがって今後の整備時には、このような古代寺院の特徴である正面性と中心軸線を十分に活かすことのできる整

備がなされなければならないだろう。

また、古代建築物を復元する際には、各古代国家別に優先的に復元しなければならない対象の選定と、その復元順位を決めるという手続きを必ず経る必要がある。復元整備は平面的整備から立体的建物復元まで可能で、特に建物復元は一般の人に過去の建築を具体的に理解させるという一次的目的を達成できる最も積極的な方法として使用されうるであろう[39]。

② 整備の手法はどのようなものがあるのか

整備にはいくつもの手法がある。しかし、埋蔵文化財として発掘調査後、整備しなければならない遺跡と、その法灯が今日も続く寺院では用いる手法も当然異なる。保存と保全、全体復元と一部復元という大命題が設定されなければ整備手法は混在し、むしろ混乱することすらある。

実際、発掘調査は遺跡の破壊をともなう行為であるが、決して一回の調査で過去の全ての現象を把握することはできない。このような遺跡は後代に伝えて、より詳細な調査結果が蓄積できるようにせねばならないにもかかわらず、一回の発掘調査を通じて還元できるはずのない整備がなされるのであれば、これは発掘調査よりもっと深刻な破壊と毀損をもたらすだけだろう。したがって、整備の手法は、再び元の状態に還元することが可能な方法でなされねばならないだろう。

そして、古代寺院の遺跡においては回廊・垣（タムジャン）によって取り囲まれた寺域、および中心建物群（金堂、塔、講堂など）の状況を目で見える形態に整備することによって、空間の規格性を表現することを基本とせねばならない。また寺域全体の機能、および範囲を表現するために僧坊、鐘楼などの付属的な建物址を表現する方法も重要である。したがって、これらの部分的な復元展示、または視線を誘導する立体標示を研究し、建物址の平面標示、および基壇の復元展示などを適切に組み合わせた方法が使用されることが望ましい。さらには、部分的に基壇内部の版築を露出させて展示したり、当時の宗教活動の姿を説明板などによって示すことなどを通じて、荘厳な古代寺院の伽藍空間を想像し、刺激することも整備の手法となりうるであろう。

いまや整備は該当遺跡のみならず、より空間的に拡大させる必要性がある。すなわち、古代寺院の雰囲気や空間感、体験感を極大化させるためには周辺の景観もその環境に合うように考慮しなければならないであろう。

③ 整備の問題点は何か

発掘調査後、遺跡整備まで日本でどのくらい時間がかかるのか正確には知らないが、韓国の場合、発掘の後、整備される前までの間に、遺跡が毀損される事態が発生している[40]。発掘調査を実施すると同時に、発掘調査機関が整備までをも考慮すれば、このような問題

は解消できると考えられる。実際に、発掘調査や整備計画樹立、計画にもとづいた整備、補修施工の担当者がそれぞれ異なるため、意見交換と資料の共有は絶対に必要である。しかし、実際にはできていない場合が多く、その結果、発掘された遺跡を全く違う遺跡にみせてしまう結果を招いている。

また遺跡の接近方法、教育的効果、レジャーなどの完全な活用方法案がない遺跡の整備は、最小限になされなければならない。現在地方自治体によってなされている観光地化した遺跡整備、観客のいない展示館や博物館の建設は慎重に検討されねばならない。

④ 今後の整備においてすすむべき方向性とは何か

日本では遺跡の整備後、その施工過程を記録した遺跡整備報告書が刊行されている。これは法律で規定されたものではないが、法隆寺で実施された長期間の調査と修理の記録の伝統によって、他の遺跡整備においても整備報告書が刊行されている。しかし韓国では、遺跡整備前までの報告過程、すなわち発掘調査報告書、整備計画書などは年次的に発刊されるが、遺跡整備後の結果報告書や継続的な整備計画書などはほとんど発刊されていない。このことは、本来の発掘調査や検討結果が遺跡整備にどれだけ、どのように反映されているのかを知ることができないという結果を招き、遺跡整備がもつ本来の意味、すなわち伝統技術の継承という側面において、どのような技術がどこへ、どのように適用されたのかを知ることができないという結果を生み出している。したがって、今後は遺跡整備技術の発展と蓄積という側面からも、このような遺跡整備報告書の刊行は義務化されねばならないであろう。

また、遺跡整備後の遺跡管理において、韓国も日本も、ほとんど案内板に該当遺跡だけを紹介をしているが、周辺の遺跡を一つの案内板に提供するなどして、観光客への配慮を広げ、地域の活性化、および利益の拡大を誘導する必要がある。一つの文化遺跡は見せ場が少ないが、関連文化遺跡と連携することによってすばらしい文化遺跡地帯を構成できる。まず、周辺の文化遺跡現況を把握し、これに対する潜在力を評価、優先的な連携計画を立て、これを地域的にあるいは線的に連結した総合的な計画を樹立する必要がある。もちろん、ウェル・ビーイング（Well-Being）や現代的文化施設としての森、生態環境、展示館、博物館などとも連携されるべきであろう。

最後に、遺跡の整備は今の時間的観念によって終わるものではない。今は盛土だけしたり、あるいは放置されたり、建物址の上に芝生敷きだけされて、最小限の保存に留まっているかもしれない。しかし、いつか昔の建築技法が再現され、その建築物が建立されて、もう一度本来の機能を取り戻す可能性を常に持っている。したがって、遺跡の整備はこの点を忘れずになされねばならず、保存、復元などそれぞれの遺跡整備は、常に還元可能な方法でなされねばならないだろう。

註

1 洪潤植『韓國佛教史의 研究』教文社、1988、pp.6-7。
2 太田博太郎『日本建築史序説』彰国社、1964、pp.56-72。
3 『三国史記』巻第十八、高句麗本紀、第六。
4 『三国史記』巻第十九、高句麗本紀、第七。
5 尹張燮『韓國建築史』東明社、1973、p.58。
6 김동욱『한국건축의 역사』기문당、2003、p.46。
7 『三国史記』巻第二十四、百済本紀、第二。
8 『三国遺事』巻第三、興法第三、難陁闢済條。
9 洪潤植、前掲註1文献、p.23。
10 洪潤植、前掲註1文献、p.38。
11 鄭子永「한국 고대 목탑지 기단 및 심초부 축조기법 연구-부여 군수리사지를 중심으로」崇實大學校 大學院 史學科 碩士學位論文、2006。
12 尹武炳『定林寺址發掘調査報告書』圖書出版民族文化、1981。尹武炳『扶餘定林寺址蓮池遺蹟發掘報告書』忠南大學校博物館、1987。
13 國立扶餘博物館『陵寺』本文/圖面_圖版、國立扶餘博物館遺蹟調査報告書第8冊、2000。
14 國立扶餘文化財研究所『王興寺 發掘中間報告』扶餘文化財研究所學術研究叢書第33輯、2002。
15 圓光大學校 馬韓.百濟文化研究所『彌勒寺址 東塔址 및 西塔調査報告』1974。國立扶餘文化財研究所『彌勒寺址遺蹟發掘調査報告書Ⅱ』國立扶餘文化財研究所學術研究叢書第13輯、1996。國立扶餘文化財研究所『彌勒寺址西塔周邊發掘調査報告書』國立扶餘文化財研究所學術研究叢書第28輯、2001。
16 圓光大學校 馬韓・百濟文化研究所『益山帝釋寺址試掘調査報告書』遺蹟調査報告36輯、1994。
17 김동욱、前掲註6文献、p47。
18 『三国史記』 巻第四、新羅本紀、第四。
19 李元教「전통건축의 배치에 대한 지리체계적 해석에 관한 연구」서울대학교 박사논문、1992、p.43。
20 洪潤植『三國遺事의 韓國 固有 文化』圓光大學校出版局、1985、pp.326・327。
21 洪潤植「新羅 黄龍寺 經營의 文化的 意味」『馬韓 百濟 文化』7、圓光大學校馬韓百濟文化研究所、1984。
22 『三国遺事』 巻四、慈蔵定律條。
23 申昌秀「興輪寺의 發掘成果 檢討」『新羅文化』20、東國大學校新羅文化研究所、2002、p.11。
24 金尚太「新羅時代 伽藍의 構成原理와 密教的 相關關係 研究」弘益大學校 大學院 建築學科 建築計劃專攻 博士學位請求論文、2004。
25 國立慶州文化財研究所・慶州市『感恩寺發掘調査報告書』學術研究叢書18、1997。
26 김동욱、前掲註6文献、p.68。
27 恵谷隆戒講述『仏教史概説』仏教大学、1975年、pp.206-217。
28 福山敏男ほか『建築史図集』学芸出版社、1975年、pp.52-53。
29 文化財管理局 文化財研究所『皇龍寺 遺蹟發掘 調査報告書Ⅰ』1984、pp.23-33。
30 양정석『皇龍寺의 造營과 王權』서경、2004、pp.24-41。
31 金正基「彌勒寺塔과 定林寺塔-建立時期의 先後에 관하여」『考古美術』第164號、1984。
32 국립문화재연구소,『정림사지 정비사업 기본계획Ⅰ』2007。
33 張慶浩「百濟 彌勒寺址 發掘調査와 그 成果」『佛教美術』10、東國大學校博物館、1991、p.61。

34　文化財廳『'98年度 文化財修理報告書（下卷）』1999、pp.233-237。
35　奈良文化財研究所『山田寺発掘調査報告書』2002年。
36　奈良文化財研究所『奈良文化財研究所 紀要』2001年、pp.76-84。
37　奈良国立文化財研究所『遺跡整備資料Ⅰ』（寺跡・国分寺跡）、1982年、p.30。
38　文化財部記念物課『史跡等整備のてびき－保存と活用のために－』Ⅱ 計画編、2005年、p.184。
39　김봉건「복원과 문화유산 보존정책」『황룡사 복원 국제 학술대회논문집』2006、pp.36-39。
40　李孝貞「建築發掘遺蹟址 整備方案에 關한 研究－檜巖寺址를 中心으로－」（明知大學校 文化財學 碩士學位論文、2006、pp.33-92）の発掘時期と整備時期参照。

参考文献

[韓国語]
『三國史記』
『三國遺事』
尹張燮『韓國建築史』東明社、1973。
圓光大學校 馬韓百濟文化研究所『彌勒寺址 東塔址 및 西塔調査報告』1974。
尹武炳『定林寺址發掘調査報告書』圖書出版民族文化、1981。
金正基「彌勒寺塔과 定林寺塔－建立時期의 先後에 관하여」『考古美術』第164號、1984。
文化財管理局 文化財研究所『皇龍寺 遺蹟發掘 調査報告書Ⅰ』1984。
洪潤植「新羅 黃龍寺 經營의 文化的 意味」『馬韓 百濟 文化7』圓光大學校馬韓百濟文化研究所、1984。
洪潤植『三國遺事와 韓國 固有 文化』圓光大學校出版局、1985。
尹武炳『扶餘定林寺址蓮池遺蹟發掘報告書』忠南大學校博物館、1987。
洪潤植『韓國佛教史의 研究』教文社、1988。
張慶浩『百濟寺刹建築』藝耕産業社、1990。
東國大學校博物館『佛教美術』10、1991。
李元教「전통건축의 배치에 대한 지리체계적 해석에 관한 연구」서울대학교 박사논문、1992。
圓光大學校 馬韓百濟文化研究所『益山帝釋寺址試掘調査報告書』遺蹟調査報告36輯、1994。
國立扶餘文化財研究所『彌勒寺址遺蹟發掘調査報告書Ⅱ』國立扶餘文化財研究所學術研究叢書第13輯、1996。
國立慶州文化財研究所・慶州市『感恩寺發掘調査報告書』學術研究叢書18、1997。
文化財廳『'98年度 文化財修理報告書』1999。
國立扶餘博物館『陵寺』本文/圖面・圖版、國立扶餘博物館遺蹟調査報告書第8冊、2000。
國立扶餘文化財研究所『彌勒寺址西塔周邊發掘調査報告書』國立扶餘文化財研究所學術研究叢書第28輯、2001。
東國大學校新羅文化研究所『新羅文化』20、2002。
김동욱『한국건축의 역사』기문당、2003。
金尚太「新羅時代 伽藍의 構成原理와 密教的 相關關係 研究」弘益大學校 大學院 建築學科 建築計劃專攻 博士學位請求論文、2004。
양정석『皇龍寺의 造營과 王權』서경、2004。
국립문화재연구소『감은사지 서삼층석탑』、2005。
李孝貞「建築發掘遺蹟址 整備方案에 關한 研究－檜巖寺址를 中心으로－」明知大學校 文化財學 碩士學位論文、2006。
국립문화재연구소「복원과 문화유산 보존정책」『황룡사 복원 국제 학술대회논문집』2006。

대한불교조계종 총무원『북한의 건축문화재』2006。
鄭子永「한국 고대 목탑지 기단 및 심초부 축조기법 연구-부여 군수리사지를 중심으로」崇實大學校大學院史學科 碩士學位論文、2006。
국립문화재연구소『정림사지 정비사업 기본계획Ⅰ』2007。
［日本語］
『日本書紀』
朝鮮古蹟研究会「扶餘に於ける百済寺址の調査（概要）-扶餘東南里廃寺址発掘調査」『昭和十三年度古蹟調査報告』、1939年
太田博太郎『日本建築史序説』彰国社、1964年。
福山敏男ほか『建築史図集』学芸出版社、1975年。
恵谷隆戒講述『仏教史概説』仏教大学、1975年。
日本建築学会『日本建築史図集』彰国社、1980年。
奈良国立文化財研究所『遺跡整備資料Ⅰ』（寺跡・国分寺跡）、1982年。
近畿日本鉄道『奈良歴史手帖』1999年。
奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要2001』2001年。
奈良文化財研究所『山田寺発掘調査報告書』2002年。
奈良文化財研究所『日中古代都城図録』2002年。
鈴木嘉吉ほか『古代の寺院を復元する』学習研究社、2002年。
文化財部記念物課『史跡等整備のてびき－保存と活用のために－』Ⅱ 計画編、2005年。
左方郁子『法隆寺』小学館、2007年。

挿図出典

第２表　『史跡等整備のてびき－保存と活用のために－』Ⅱ 計画編、p.6.
第１図　『한국건축의 역사』p.46.
第２図　『한국건축의 역사』p.58.
第３図　『昭和十三年度古蹟調査報告』図版37.
第４図　『한국건축의 역사』p.47.
第５図　『한국건축의 역사』p.59.
第６図　『한국건축의 역사』p.57.
第７図　『한국건축의 역사』p.57.
第８図　『감은사지 서삼층석탑』p.66.
第９図　「新羅時代伽藍 의 構成原理 와 密教的 相関関係 研究」p.140.
第10図　『한국건축의 역사』p.68.
第11図　대연건축
第12図　『日中古代都城図録』p.26.
第13図　『日本建築史序説』p.57.
第14図　『日中古代都城図録』p.26.
第15図　『日中古代都城図録』p.82.
第16図　『日本建築史序説』p.57.
第19図　国立文化財研究所ホームページ
第20図　国立文化財研究所ホームページ
第23図　『정림사지 정비사업 기본계획 완료보고회 자료』

第31図　『古代の寺院を復元する』p.8.
第42図　『奈良文化財研究所紀要2001』p.77.
第47図　豊川市ホームページ.
第48図　豊川市ホームページ.

한일 고대사찰의 정비방안 연구
- 6~8세기 사찰의 사례를 중심으로 -

金 哲 主 · 卓 京 柏

요 지 한국과 일본의 고대 국가는 왕권강화와 사회통합의 원리로 불교를 받아들이면서 사찰이 건립되게 되었다. 이러한 사찰은 오랜 시간이 지나면서 폐사가 되기도 하고 불국사와 같이 현재까지 그 법맥을 이어가고 있다. 현대로 들어오면서 이러한 사찰은 그 시대의 문화유산으로서 보존과 활용이라는 측면에서 정비가 이루어지고 있다. 본고에서는 고대 국가의 불교 수용에 따른 사찰의 형성 과정과 정비 사례를 검토하였다. 그 결과 고대 사찰의 중심 요소는 탑 중심축선 정면성이고 향후 이러한 요소를 가지고 있는 고대사찰의 특징과 매력이 잘 나타날 수 있는 정비 방안을 도출하고자 하였다.

키워드 : 고대사찰, 탑, 중심축선, 정면성, 유적정비

A Study on the Conservational Maintenance of the Ancient Temple in Korea and Japan : Focused on the Ancient Buddhist Temple Site of the 6th to the 8th Centuries AD

Kim, Chul Ju · Tahk, Kyung Baek

Abstract : The ancient states of Korea and Japan had built many Buddhist temples under the admission of Buddhism for the reinforced of the regal power and for integrating of the society. The temples were ruined or have been repaired for a long time. Entering the modern times, we have maintained for the aspects of conservation and utility of the cultural heritage. Not the more, the ancient Buddhist temples have been kept in order for these reasons.The varieties of the site planning for the ancient Buddhist temples with the admission and expropriation of Buddhism and even the case study of the modern maintenance were studied in this paper. As a result we found out the main factors of ancient temples such as pagoda, main axis and frontality. Furthermore, we attempted to conduct the advanced process of the maintenance of representation of these factors.

Keywords : Ancient Buddhist Temple, Pagoda, Main Axis, Frontality, The maintenance of cultural heritage